
ショートケーキ

午雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショートケーキ

【Nコード】

N0265V

【作者名】

午雲

【あらすじ】

俺と沙耶香とは恋人どうし。でも、まだ学生な俺は、他の女の娘にも、つい目移りしてしまう。沙耶香との約束も忘れて、1。

大学生も、三回生になると、退屈だ。

思い思い、将来の事を考え始めて、

みんな、急に大人びて来る。

（・・・もう、自由時間も終わりか。）

知り合いと、ほとんど行き合う事の無い、

構内を独り、ぶらついて居ると、

急に、そんな気分がした。

俺にも一応、彼女は居る。

一回生の時、連れと一緒に入ったテニス・サークル。

男は、ここの学生ばかりだけど、

女の娘の方は、近所の短大生が多くて、

沙耶香とは、そこで知り合ったのだ。

あれから三年・・・

なので、彼女は春に短大を卒業し、今はOLをして居る。

ひと足先に社会人デビューした、彼女。

会社での付き合いが忙しくて、メールでしか話せない日々。

そういう意味でも、俺は退屈して居た。

気が付くと、足はサークルの溜まり場へー。

みると、机を出してる定位置の路傍で、

後輩の誰彼が、しきりと一人の女の娘を口説いて居る処ろだった。

「あ、高橋先輩、イイ処ろに！」

「うん？」

新入部員を勧誘中らしい。

さりげないファッションだけど、オーラがある。

俺も、ひと目で気に入ってしまった。

その場の勢いで、喫茶店へと繰り出し、

ショートケーキとかおごって、もてなす。

そんな事には、相手は、もう慣れっこなようで、

気軽に名簿へ名前だけは書いてくれた。

「さあ、誰がゲットするかですね〜！」

「本気だしますよ？おれ〜！」

「行ってみよう！」

（・・・どこへでも行きやがれ！）

俄然、盛り上がる後輩たちを尻目に、

もう三回生の俺は、ひそかに溜め息を吐くのだった。

テニス・サークルなので、テニスはする。

でも、それは口実なので、

練習の後、男子のクルマに分乗して、御飯とか食べに出掛けるのが、

つまり、活動のメインなのだった。

「・・・」

しかしー

三回生になると、途端に、人氣が失くなる。

女の娘からすれば、

（あのヒト、余り？）

と邪推されるからだ。

ところが、その日、そんな俺の空いた助手席へ、

噂の彼女が、近寄って来た。

「高橋さん、隣り・・・いいですか？」

（！？）

「え？あ・・・うん。」

他人知れず突きささる、後輩たちの視線が痛い。

「高橋さん、ロイヤル〇〇〇に集合ですからね！」

「道まちがえないで下さいよ？」

（ふたりきりで）

早速、聞こえよかしな野次がとぶ。

果たして、どんな顔つきをしてる事か、想像すると、ちょっと可笑しかった。

後輩たちを先に行かせて、

彼女とふたりきり、クルマを走らせる。

「プルルルルル・・・」

途端にメール着信音が鳴る。

沙耶香からのメールだ。

反射的に、携帯を開けて目を通す。

<仮病つかって会社、休んじゃった。久しぶりに会おうね！>

(!?)

視線を感じて、はっと隣りをみやる。

「もしかして、彼女？」

いたずらっぽく、彼女が微笑む。

彼女のオーラが、俺の胸をときめかす。

そんな俺に、彼女がいう。

「今日、私、誕生日なんです。一緒に祝ってくださいませんか？」

（！？）

「帰りも・・・送って下さいね？」

「う、うん。」

「うれしい！もっと飛ばしちゃって下さい！」

（レッツ・ゴー！）

「ブウンッ」

俺は、思わずアクセルを踏み込んで居た。

「レストランはー？」

「パス、パス。」

「ーじゃ、どこに？」

「ショット・バー・・・とか。」

「は？」

「・・・いいでしょ？高橋先輩・・・」

彼女の視線にドギマギしながら、

俺は、あわてて問い返す。

「君、お酒・オツケーなの？」

「気分は・・・二十歳ですよ。」

（クラ・・・）

俺は、めまいがした。

大人の遊びには縁の無い俺。

でも、心当たりが一軒だけあった。

連れの知り合いの知り合いの・・・

そのまた知り合いが経営するとかいう、ショット・バー。

カクテルといえば、ソルティ・ドッグしか知らないけれど、

勇気を出して、彼女をそこへ案内した。

「乾杯〜！」

（カッチン）

カウンター席に陣取って、グラスを合わす。

彼女は飲み始めるけれど、俺は飲むフリだけ。

（今日の運転手は俺しか居ないじゃないか？）

危うく、その事に気がついて、理性を働かせたのだ。

「だあれも来ませんね？」

「ん？」

「・・・サークルのヒト。」

「うん。」

「さっすが三回生！」

（きゃっ）

アルコールが入ったせいかな、

彼女の眼が潤みを帯びて来る。

しかして、

バーテンとの会話が弾み、盛り上がって居るのは、

彼女のみ。

素面のままにして、ほとんど初心者な俺は、
同じ空間に居ながら、

しぜん蚊帳の外に置かれて居た。

頃合いをみて、俺が切りだす。

「今日は、このくらいにしとく？」

「えー！ここでお別れですか？」

「いや、もう帰らないと、サ・・」

「ウソーっ信じられな〜い！」

彼女が甲高い声をだす。

そして、いう。

「あ、わかった！」

「なにが？」

「明日の授業とか気にしてるんでしょう？」

「え？」

「寝坊したってどうってコトないじゃないですか？三回生なのにー。」

「・・・寝坊とかじゃなくて、サ。」

「んもう」

拗ねて、渋る彼女に、バーテンも苦笑する。

それを、どうにかなだめて、

勘定を済まし、

パーキングまで連れて行く。

そして、彼女を助手席に乗せると、

「・・・寝てていいから。」

俺は再び、エンジンをかけ直す。

「酔いざましする？」

「海が見たいです。」

「もう、真っ暗だよ？」

「ーじゃ、ドライブしたい。」

(・・・)

さっきワガママを通した手前、

さすがに、ここで、イヤとは言えない。

とてつもない回り道をして、

途中、夜の闇を映す、一面、暗い海辺を眺めたりしながら、

やがて、

学校の近く、

もと来た場所まで帰り着く。

長いドライブ。

その間、

助手席の彼女は、

もう、ほとんど口を利こうとはしなかった。

「高橋先輩、ここで、イイです。」

「あ、うん。」

「送ってくれてありがとうございます！」

「いや、別に。約束だから。」

「今夜は楽しかったです！メールの彼女とお幸せに！」

（バタム）

彼女が別れ際、

そう口にくれたのが、せめてもの救いだったけれど、

時計を見ると、もう夜更けの二時・・・

女子寮の裏門を乗り越えて、

音も無く奥へと消える彼女の姿を見届けながら、

（・・・やるなア。）

運転席に置き去りとなった俺は、

やっぱり、感心せずには居られなかった。

そこから先、ほとんど無意識にハンドルを切り、

どこをどう帰ったものやらー

駐車場へ降り立って、ふとマンションを見上げると、

(!?)

見覚えのあるベランダの窓・・・

そのむこうに、まだ明かりが点いて居る。

何を隠そう、俺の部屋なのだから、見間違えるはずがない。

「・・・待ってたのか？」

「・・・うん。」

「明日の仕事は？」

「どうだっていいよ、そんなの。」

「は？」

「今日という日は、二度とやって来ないから・・・」

小声で言って、沙耶香が微笑む。

冷房が程良く利いて、

居心地の好い、リビングルーム。

冬はコタツなテーブルの上に、ふたつ、

向かい合せに、並んで居るのは、

まだ空っぽなティーカップと、

いちごの乗った、ショートケーキ。

それを目に留めて、

「・・・」

俺が無口に佇んで居ると、

「あ、マロンの方が良かった？」

困った顔して、彼女がいう。

その刹那、

俺の中で、何かが閃く。

（・・・夏にショートケーキ）

（ケーキ？）

（えっと今日は・・・）

（今日は）

（あ・・・）

「ハ、ハッピー・バースデー、沙耶香。」

「うん。ありがとう！」

とっさに思い出して、そう告げた俺。

彼女の顔が、ぱっと輝く。

（・・・セーフ・・・）

彼女が立って、紅茶の支度をして居る間・・・

俺は、いちごを一個、つまみ食いして、

（・・・ゴメン、沙耶香・・・）

その言葉ごと、

一緒に飲み込んだのでした。

(おしまい)

(後書き)

ケーキといえば、誕生日。

全七回、参加する事が出来て、よかったです！
ありがとう☆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0265v/>

ショートケーキ

2011年10月5日14時59分発行